

『歡喜の余滴』より

226

昭和二年 十二月 十三日

明かにお慈悲が聞こえたら明かになる。

堕ちともない間は助かつてはいない。

疑わん様にすると言っている者はつてる。

疑いなく堕ちる者でなければ疑いなく助からぬ。

227

昭和二年十二月十四日

問 堕ちる機か 助かる機か。

答 堕ちる機が 助かる機。

229

昭和二年十二月十六日

正直に見よく。自分を買冠るな、堕ちる機を知らない者は助ける法を知らない、極楽一定を知らない者は地獄一定を知らない。

231

昭和二年十二月十八日

明十町の三原さんが 午前六時頃から久しい間の煩悶を訴えて来られた。どんなに話しても聞き入れて下さらない、理屈

は判っているが信じられない、涙を流し胸を叩きながら、「先生 他に変わった教え方はありませんか」 唯より他に変わった事はありません、別な事を教えたら別のお土に行きます。「どうしたら此の胸が承知するでありますようか」 知りません「それでも先生は命懸けで教えてやるとつたではありませんか」 私の持っているお浄土なら直に許しても上げますが、善知識に縋ってはいけません、其の泣き泣き墮ちるのが如来の一人子であります。「どうしても判りません」と言っ苦しい胸を抱えて 十一時半頃帰宅された。

午後一時からは婦人会の説教、の講和は三原さん一人に専注した、喉が破れて倒れるか、石のような心が動くか 二つに一つの命懸けであった。其の講演の真最中声を挙げて泣き出し「判りました、御院家さん 声が出なくなるから止めて下さい、何か明かに親に返事して貰おうと待っていました、成り切らない悪性の儘が 御親の勅命通りに成れたとは思議でございませす」と叫んでくれたのには、思わず涙に咽んで暫くは講演が出来なんだ。並んでいた人々は涙流して合掌した、其の真摯な態度、敬虔な姿は百千万の言辞よりも遥かに勝れている。

233

昭和二年十二月二十二日

前の頃は 有難い心が出て来た時に有難かったが、今は有難くない心が出てきてもお慈悲が有難い。

234

昭和二年十二月二十三日

どちらに向いても南無阿弥陀仏、私の儘が南無阿弥陀仏、どうしてこんなに嬉しいのであろうか、何故喜ばずにはいられないのだろうか。それもその筈、念々の称名には三世十方の諸仏、十方恒沙の功德を噴き出しているのじやもの。

235

昭和二年十二月二十四日

何故唯を唯と聞いてくれないのかと求めている時には身の剥がるいでしたが、ワーと罪悪の恐ろしさに驚いた時と（地獄一定）唯ぞーの勅命が聞こえた時と（必得往生）は同時であつて、出る言葉は「親様三」より他には無かつた。

236

昭和二年十二月二十五日

れん成らんと泣いていたが
成れん儘と成れたが不思議。

239

昭和二年十二月三十一日

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、昭和二年も既に終わろうとしている、生まれ難い人生に生を受け、聞き難い一乗究竟の極説を聞き、待ち侘びてある安養の親里を慕い、残る命の有る限り、大悲深重の鴻恩を叫ばざるを得ない身にさして戴いた事を感謝せずにはいられない、而し僅かばかりでも、それに正比例するだけの努力が欲しい、せめても御親の念方に逆行しないだけの報恩の念が欲しい。思念すればする程、反省すればする程逆行しつつある魂に驚き、微塵ばかりも御心を休め奉る暇のない事を懺悔せずにはいられない。絶対の悪を無条件で赦してくれた真実の御親を知りつつも、何故身を粉にしないか、何故骨を碎かないか、嗚呼、御恩知らずは法龍である、無量永劫の魂の解決をして戴きながら、深遠なる仏恩に報い得ない悪魔は法龍である。大地にひれ伏して罪を謝し、命を投出して鴻恩に報いよう。

さらば昭和二年よ、南無阿弥陀仏。
世の中安穩なれ仏法弘まれかし。

合掌